〈小説〉選考委員特別賞

市原の父

佐藤　勉

今年初めて市原に雪が舞った、一月下旬のある朝のこと。

本日看護を受け持つ患者さんの情報収集のため、病棟のスタッフステーションでパソコンを操作していたときだった。

「志村君、ちょっといい？」

振り向くと、僕の上司で看護主任の山下恵子さんがファイルを持って、僕の後ろに立っている。山下主任は緩和ケア認定看護師の資格を持つ、看護師歴三十年を誇るベテランだ。

「何でしょうか」

「今日、５０６号室に入る予定の患者さん、あなたに担当してもらいたいの」

山下主任は生真面目な顔で言った。

「名前は御園生（みそのう）雅史さん。六十三歳の男性よ。カルテをよく確認しておいてね」

「わかりました」

午前中に担当の患者さんを巡回したあと、昼食休憩の前にスタッフステーションで再びパソコンを開く。

御園生さんの病気はスキルス胃ガンだった。

スキルス胃ガンは早期での発見が難しく、検査で見つかったときはすでに末期の状態であることが多い。五年生存率が約二十％と他のガンに比べても低く、たちの悪いガンとして知られている。

スタッフミーティングのあと、僕は早速、５０６号室に向かった。

病棟の廊下を歩いていると、病室から楽しそうな男女の笑い声がもれてきた。御園生さんとその奥さんの声だろうか。

僕は「失礼します」と声をかけながら、５０６号室に入った。カーテンが開いていて、真冬の落ち着いた太陽の光が病室をやさしく包みこんでいる。

白髪だらけの男性がベッドに横になっていた。ベッドの前にあるパイプイスに、白いワンピースを身にまとった、五十歳代くらいの小柄な女性が座っていた。

「こんにちは。担当看護師の志村です。よろしくお願いします！」

僕は深く頭を下げた。顔を上げて患者の御園生さんを見たとき、あれ、と思った。この人――

「君、雄介じゃないか？」

御園生さんが珍しいものを見るような目で僕の顔を見上げた。

「そうです。学生時代、御園生さんにお世話になった志村雄介です」

やせ細ったせいで昔と風貌が変わっていたから、気づかなかった。

山下主任から御園生さんのフルネームを聞いたとき、もしかしたらと感じていたのだ。珍しい名字だから。

こんなところで再会するなんて……。
「おまえ、市原に戻っていたんだな」
「昨年の四月に、東京の本院から転勤してきたんです」
うれしいはずなのに、僕は複雑な気持ちだった。なんといっても、御園生さんは末期ガン患者なのだ。
緩和ケア病棟に異動して十カ月――その間、僕は看護師として、たくさんのガン患者の最期に立ちあってきた。
御園生さんも、僕が見送ることになるのだろうか……。

御園生さんと初めて出会ったのは僕が大学一年のときだった。今から九年も前になる。
僕は東京の多摩地区にある調布市で生まれた。
幼少の頃にぜんそくを患い、発作に苦しんでいた。小学校を卒業するまで、毎年のように入院していた。
発作を繰り返す僕を献身的に見てくれる看護師さんの姿を見て、将来、看護師になろうと決意した。自分の力で、病気で苦しむたくさんの人を救いたいと。
高校を卒業したあと、千葉県市原市にある看護大学に入学した。
調布の実家から通うのは遠いため、五井の大宮神社の近くに建つアパートを借りた。そこから、潤井戸（うるいど）にある大学に通った。
アパートのとなり部屋に住んでいたのが御園生さんだったのだ。
御園生さんはお坊さんのようなツルツルした頭、口のまわりは熊のようにヒゲがぼうぼうで、いつもステテコに白いシャツ姿で歩き回っていた。あやしいおじさんというイメージがあった。
廊下で出会ったときにあいさつや世間話をする程度だったが、ある災難がきっかけで僕との距離が近くなった。
僕が大学二年生のときの、蒸し暑い夏の夜だった。御園生さんが腹痛を起こして救急車で運ばれたのだ。
御園生さんは独身で、両親や親戚は近くにいないらしい。やむを得ず、救急に通報した僕が救急車に同乗して、病院まで付き添った。
診察の結果、病名は「尿管結石症」だった。
二週間ほど入院して、結石は無事に体の外に出た。尿管結石症は、石が尿管から膀胱に落ちてしまえば痛みは消える。尿管に詰まっていた石の大きさは直径八ミリだったらしい。
退院した次の日、御園生さんが僕のアパートの部屋にやってきた。
「夜中に付きあってもらって悪かったな。見舞いにも来てくれて」
御園生さんが申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。
「いいえ。困ったときはお互いさまですよ」
口には出さなかったけれど、僕にとって看護師になるための修行になった。そう、プラスに考えればいい。
「あの痛み、きつかったでしょう？」
「ああ。俺の五十六年の人生で最悪の苦しみだったぞ」
「尿管結石の激痛は、男が感じる痛みの中で最大級と言われてい

ます。再発しないように、これからは食生活に気をつけてくださいね」
「そうだな。肝に銘じる」
御園生さんは目を輝かせながらうなずいた。
「ところでおまえ、ラーメンは好きか？」
何を唐突に、と思ったが、御園生さんはいつもこんな感じだ。
「好きですけど」
「俺の女がラーメン屋をやっているんだ。おまえにラーメンをおごってやる。この前のお礼だ」
そういえば、御園生さんの部屋に小柄な女性が出入りするのを見たことがある。熊みたいな風貌の御園生さんに恋人がいるなんて、人は見かけによらないものだ。
「ごちそうになります」
ＯＫしたのは、ラーメンよりも御園生さんの恋人がどんな人なのかに興味があったから。
次の水曜日の昼、御園生さんの愛車ジムニーに乗りこんだ。
御園生さんの恋人が経営するラーメン店は、姉ケ崎駅の近くにあった。五井から車で十五分ほどの距離だ。
駅近くの商店街の一角に建つ、小さくて古びたお店だった。
出入り口の上に「麺　やしき」と白い文字で書かれた看板がある。のれんが出ておらず、扉に「定休日」の札がかかっていた。
「今日は定休日のようですよ」
「いいんだ。今日は特別だ」
えっ、と僕が声を上げる。なぜ？
御園生さんは店の扉を力強くガラッと開ける。
カウンター席が五席、四人掛けテーブルが三台あるだけの、こぢんまりとした店内だった。壁が黄色く薄汚れていて、開業してから何十年もたっているような雰囲気だ。
店内にお客さんが一人もいない。定休日なので当然だ。
調理室に、黒いバンダナをかぶり、黒いユニフォームに青いエプロンを身にまとった女の人が立っていた。
鍋からぐつぐつと白い湯気が立ち、豚骨としょうゆの香りが漂う。
「おーい、美奈子。客人を連れてきたぞ」
御園生さんの大きな声に、女性が顔を上げた。
「いらっしゃいませ」
女性は僕に笑顔を向け、小さくお辞儀をした。
僕は控えめに頭を下げる。
「こいつは屋敷美奈子。俺の自慢の女だ」
美奈子さんはチャーシューを切っていた。色白で、額が広く目がぱっちりとしていて、女優さんのような雰囲気があった。この人が本当に御園生さんの彼女？　まるで美女と野獣だ。
「今日はおまえのために、店を貸し切りにしたんだ」
僕は緊張と恐縮と食欲が頭の中で混じりあって、言葉に詰まった。
「ぼ、僕なんかにそんなこと、いいんですか？」
「いいさ。おまえは俺の命の恩人だからな」
「病院に付き添っただけです。大げさですよ」

「まあ、とにかく座れ」
御園生さんは、カウンター席を指でさした。並んで座る。
ラーメンが出来あがるまでの間、熟年カップルと話をした。
美奈子さんは姉崎の出身で五十二歳とのこと。今から二十年前に父を亡くし、その際に、父が経営していたラーメン店を引き継いだそうだ。二十四歳のときに高校時代の同級生と結婚したものの、五年後に離婚。子供はおらず、以降は独身を通しているという。
御園生さんは市原市牛久の出身だ。かつて市内にあった鶴舞商業高校を卒業後、姉ケ崎駅の近くにあるイトーヨーカドー姉崎店に就職した。今も引き続き勤めているとのこと。
「イトーヨーカドーではどんな仕事をしているんですか?」
「警備員だ。店内を巡回点検したり、駐車場で車を誘導したり。姉崎店が開業したときからだから、もうすぐ勤続四十周年になるな」
「四十年か。すごいですね」
僕は何度か、イトーヨーカドー姉崎店で買い物をしたことがある。
「もうすぐ定年だが、再雇用で働くか辞めるか、迷っているんだ」
「定年後はお店を手伝ってと、雅史さんを誘っているの。なかなかいい返事をもらえなくて困っているのよ」
美奈子さんは「おまちどおさま!」と威勢のいい声を出しながら、カウンターにラーメンの丼を置いた。
「俺に、ラーメン屋の店員なんて似あわねえよ」
そう言って御園生さんは割り箸を割り、ラーメンを豪快にすする。
「さ、おまえも食え」
御園生さんに促されて、僕も箸を取った。
豚骨風味のしょうゆラーメンだ。薄茶色のスープの上に、大きなチャーシュー二枚と、真っ黒なノリ、切ったたまごが載っている。
麺を一気にすする。麺にコシがあり、スープとからんでくる。うまい!という単語しか思い浮かんでこない。
「市原市はな、千葉県内でも有数のラーメン激戦区なんだぞ」
返事をするのも面倒なくらい、僕は食べるのに夢中だった。
「市原市内にラーメン屋が百五十件ほどあるが、その中でも美奈子が作るラーメンは市原一だ。いや、千葉県一だな」
県内一は大げさだが、僕が今まで食べたラーメンの中で最もおいしいのは事実だ。「おっしゃるとおりです」と賛同しておいた。
スープもすべて飲み干し、完食した。満足感が半端でない。
「雄介。おまえ、東京の生まれだったよな」
「はい」
「東京にはうまいラーメン屋が数えきれないほどあるだろうよ。だがな、市原にも、東京に負けないくらいの、うまいラーメン屋がある。それが市原で生まれた俺の誇りだ」
市原がラーメン王国だというわさは聞いたことがある。とはいえ、僕は自慢できるほど市原のラーメンを食べていない。

誇りだと公言するだけあって、御園生さんの市原ラーメン談義は止まらなくなった。どんどん早口になってくる。
「美奈子さんとは、どこで知りあったんですか?」
話を遮るように、僕は自分が最も興味のあった話題を振った。
「こいつがヨーカドー姉崎店に車で買い物に来たときのことだ。店内で免許証をなくしたとかで警備員室に駆けこんできたんだ。俺が店中をかけまわって、免許証を見つけてやった。それがきっかけだ」
ぽっと、顔を真っ赤に染めた。御園生さんにこんな一面があったとは。見かけによらず、恥ずかしがり屋さんなのかもしれない。
「もう、十年も前の話だよね」
ラーメンの丼を洗いながら、美奈子さんがうふふと笑った。
「おふたりは、結婚される予定はないんですか?」
調子に乗って僕が聞くと、御園生さんは「ないな」と答えた。
「この人、結婚、考えていないみたいよ」
美奈子さんがぶっきらぼうに言う。
「美奈子さんは考えていますか?」
僕は遠慮なく質問をぶつける。
「私は一回、結婚に失敗しているから、次は慎重になる。だけど、雅史さんがその気だったら考えてもいいわ」
「俺がもしガンになって、余命を宣告されたら結婚してやるよ」
御園生さんはガハハハと大きな声で笑った。ふたりの強い愛が伝わってくる。ふたりにはさまれて、自分は場違いだなと感じた。
お礼を言って、さっさと店を出たのを覚えている。
御園生さんとの付きあいは、僕が大学を卒業するまで続いた。市原市内にある他のラーメン店を一緒に訪れたり、御園生さんのジムニーで養老渓谷や高滝ダムへドライブしたり。親子ほど年が離れているのに、年齢のギャップを感じさせない。実の父親よりも親近感を持って接していたので、僕は御園生さんのことを勝手に『市原の父』と呼んでいた。
看護師国家試験に合格して、僕は都内にあるT大学付属病院への就職が決まった。大学を卒業すると市原を離れて、都内の板橋区でひとり暮らしを始めた。仕事が忙しかったため、その後は、御園生さんとの交流はなくなった。存在さえ忘れかけていた。
「結婚されたのですか。よかった!」
病室の中で、僕は大きな声を出してしまった。ふたりには結婚してほしいなと、学生時代から勝手に思いこんでいたから。
「医者から余命一ヵ月の宣告を受けた日に婚姻届を出したんだ。昔のあの約束は冗談だったのにな」
御園生さんは、つやのないやせ細った顔を僕に向けた。
冗談が現実になったわけだ。
「雅史さんは六十歳で定年退職して、お店を手伝ってくれていました。最近は調理もできるようになったんです」
「ハハハ。美奈子の強い押しに負けたってわけだ」

「主人がガンにかかるとは、想像もしていなくて……。在宅ホスピスを検討しましたが、主人の希望で入院を選びました」
美奈子さんが寂しそうに言った。
手術で胃を摘出した。投与した抗ガン剤が効かず、ガンは全身に転移した。そして医師からの余命宣告――。御園生さんは治療を続けるのをあきらめて、病院で緩和ケアを受けながら余生を送る道を選んだ。
「まさか、雄介がこの病棟で働いているとは。つくづく、おまえとの縁を感じるよ」
御園生さんの言葉が身にしみた。そのとおりだと思う。貴重な縁をむげにはできない。僕は最後まで、御園生さんに向きあっていこうと誓った。
御園生さんの全身は骨と皮の状態なのに、おなかだけが妊婦さんのようにふくらんでいる。いわゆる腹水だ。スキルス胃ガンは進むと腹膜播種（はしゅ）を起こす。腹に水がたまるのはその影響だ。
美奈子さんは簡易ベッドを使い、毎日、病室に泊まりこんだ。自身が経営するラーメン店は現在、休業しているという。
入浴や散歩など身のまわりの介助は、僕と美奈子さんとの共同作業だった。その点、僕は助かったと思う。注射や採血などの相対的医行為はもちろん、僕の仕事になるけれど。
病室に食べ物を持ちこむのは基本、自由だ。美奈子さんは病棟内にある家族用調理室で時折、ご主人のためにラーメンを作った。御園生さんは彼女の手作りラーメンをおいしそうに食べていた。
ところが、二月に入ると食欲が極端に落ちてきた。体力がなくなり、ベッドから起き上がれなくなった。
医師が穿刺（せんし）（おなかに針をさして、腹水を抜く手術）を行っても腹水はたまっていく。腹水の量は多いときで七リットルに達した。
内臓だけでなく、腰や足の痛みを訴える機会が増えた。美奈子さんや僕がマッサージを試みても効果がない。ベッドの上で激しく暴れた。主治医に相談して医療用麻薬を処方してもらった。痛みが治まると、そのまま長い時間、ぐったりと眠った。
入院してから二週間が過ぎたある日の午後だった。
病室に入ると、美奈子さんはパイプいすに座って、ベッドで眠る夫の横顔をながめていた。
「主人は日増しに弱っています。私にはそれがよくわかります」
美奈子さんは涙を浮かべていた。看護する側の僕にも、彼の病状の変化は当然、わかっていた。
「志村さん。主人は今月の二十四日まで生きられるでしょうか」
「えっ？」僕はあぜんとする。患者さんには一日でも長く生きてほしい。看護師として、具体的な日にちなんか答えられるわけがない。
「どういう意味ですか？」
僕は平静を保ちつつ、聞き返してみた。
「あなたもご存じかもしれませんが、イトーヨーカドー姉崎店が今月の二十四日に閉店します」
そういえば、同僚の看護師の間で話題になっていた。姉崎店

は、御園生さんの勤め先であり、おふたりが知りあった場所でもある。
「その日、店舗の営業終了後に閉店セレモニーが行われます」
「はい」
「主人はセレモニーを見たい、閉店を見守ってから死にたいと言っています。主人が四十二年間、勤めていた場所だけに、思い入れが強いんです。願いをかなえてあげたい」
美奈子さんは、やせてしわだらけになった御園生さんの顔を右手でやさしくなぜた。彼女が二十四日にこだわる理由がわかった。
緩和ケア病棟に入院する患者さんの外出は基本、自由にできる。主治医はここ一週間がヤマだと言っていた。二十四日まで、まだ十日間もある。厳しい状況には違いない。
「僕も努力します。セレモニーに出られるように、一緒にがんばりましょう」
奥さんにそう伝えてみたものの、正直、僕には希望をかなえてあげる自信がなかった。
それから三日間、御園生さんは何度も吐いた。体の右半身を下にして楽な姿勢にさせても、僕がいくら背中をさすっても、苦しそうだった。戻したものに便臭があり、まれに血液が混じっていた。
主治医による診察の結果、嘔吐(おうと)の原因は重度の腸閉塞だった。
「点滴をお願いします！」
美奈子さんが泣きながら僕に懇願した。口から栄養がとれないため、美奈子さんが点滴での栄養摂取を強く希望したのだ。
生存予後が数日の段階に入った終末期の患者さんには、基本的に点滴を行わない場合が多い。点滴によって逆に患者さんを苦しませてしまう可能性があるから。検討会で話しあった結果、僕たち医療スタッフは奥さんの意志を尊重することにした。
二月二十日の朝。点滴の交換のため病室に入ると、御園生さんは小さいいびきをかいて眠っていた。ヤマをこえたのだ。彼の生命力が勝ったのかもしれない。しかし、急変する危険性は常にあった。
美奈子さんの顔色が青白い。彼女が病室で寝泊まりするようになって一カ月近くになる。その疲れだろう。無理もない。
「閉店まで、あと三日ですね」
点滴の輸液ボトルをはずしながら僕が話しかける。美奈子さんは「そうですね」と言って、ゆっくりと首を縦に振った。
「閉店セレモニーの日は僕、非番ですが、おふたりに付き添います」
「よろしいのですか？」
「御園生さんは僕にとって『市原の父』ですから、当然ですよ。もう一息です。がんばりましょう！」
「はい！　よろしくお願いいたします！」
美奈子さんの元気な声をきいて、僕は少しだけ安心した。
二月二十四日の日中は暖かく、窓の外には山の湧き水を流したような青い空がひろがっていた。

御園生さんの体調は安定している。昨日から吐き気や腹痛が治まって、点滴をはずした。今朝はおかゆを三口だけ食べた。
主治医から外出の許可が出た。第一関門は突破だ。
「顔色がいいですね。セレモニー、参加できますよ」
僕が声をかけると、御園生さんはベッドの上で目を開けた。
「おまえと美奈子のおかげさ」
御園生さんは消え入りそうな声で返してきた。
セレモニーは閉店後の十九時五分から、姉崎店の中央口前で行われる予定だ。
十七時過ぎ、用意した車いすに御園生さんを座らせる。病院の正面口を出ると、外はすでに薄暗くなっていた。福祉用車両に、御園生さんを車いすごと乗せた。
美奈子さんが運転席に、僕が車いすの横に座って発車した。病院からイトーヨーカドー姉崎店までは車で十五分ほどだ。
この先、第二、第三の関門が待ち構えている。車での移動に耐えられるか。冬の寒さに耐えられるか。御園生さんの呼吸と心音を五分おきにチェックした。体に変調をきたしたときは僕が対処しなければならない。不安と緊張で僕の心臓はバクバクだった。
駐車場で車いすを降ろし、エレベーターで姉崎店の最上階へ。美奈子さんは楽しそうに車いすを押した。僕は追いかけるように、ふたりのうしろを歩く。三階の日用品売り場、二階の洋服売り場、一階の食料品売り場と、店の端から端まで車いすを走らせる。
『閉店　売り尽くし』の張り紙がフロアのあちこちに掲示されていた。売れてしまったのか、商品が置かれていない陳列棚が目立つ。
御園生さんは薄く目を開けて、景色を懐かしむように頭を左右に動かしていた。目が潤んでいた。
「最後だから、よく見ておいてね」
美奈子さんが声をかけても、御園生さんは黙ったままだ。頭を動かすのがやっとで、話をする体力が残っていないようだった。
「別れのワルツ」の音楽が流れた。間もなく姉崎店は永遠に終わる。
中央口から店の外に出た。照明があたって、中央口の前は昼間のように明るかった。気温が下がっていて息が白くなった。寒さを少しでも防ぐため、御園生さんの腰から下に毛布をかけた。
「体調は大丈夫ですか？」
僕の問いかけに、御園生さんは首を小さく縦に動かした。
中央口の正面に車いすを止めた。
十九時五分になった。中央口の外に、三百人ほどの観衆が出口を取り囲むように立っていた。
いよいよ閉店セレモニーだ。中央口の内側に従業員二十人が横一列に並ぶ。中央口から、茶色のスーツに紺色のネクタイを締めた三人の男性が出てきた。真ん中の男性が拡声器を持ちながらあいさつを始めた。冒頭、「店長の横井です」と名乗った。
「四十四年間のご愛顧、本当にありがとうございました！」
そう、店長が締めくくり、深く頭を下げた。店長の動きに合わせるように、店の内側に並ぶ従業員も一斉にお辞儀をする。

「ありがとう〜」「おつかれさま〜」「さよなら〜」
観衆から、叫ぶような声が響く。観衆に応えるように、店長さんや従業員が何度も両手を振った。
御園生さんに掛けていた毛布が動き、するっと足元に落ちる。両手があわらになった御園生さんが小さく拍手をした。動きが弱々しいものの、心がこもっているように感じた。両目に涙を浮かべた。
車いすのうしろに立つ美奈子さんも涙を流していた。地域に愛される店がなくなるのはこんなに悲しいものなのか。耐えきれなくなって僕も涙をぬぐった。
「ありがとう」
御園生さんが小さくつぶやいた。その感謝の気持ちが姉崎店に対してなのか、美奈子さんや僕に対してなのかはわからなかった。どちらでもいい。尋ねる必要などなかった。
店長さんたち三人の従業員が店内に入ると、入口のシャッターがゆっくりと閉まる。観衆からの拍手が鳴りやまなかった。

閉店セレモニーの日から数えて二日後の深夜、御園生さんは危篤状態に陥った。
夜勤担当だった僕は、その日、同じく夜勤だった山下主任と二人三脚で御園生さんを看護した。主治医も駆けつけた。
呼吸が途切れてきた。僕が御園生さんの顔に浮いた汗を拭きとっていたとき、ふと「ラーメン」という小さな声が聞こえた。
「奥さん。ラーメンを作ってください。急いで」
「わかりました」
美奈子さんは早足で病室を出て行く。病室に戻ってくると、細かく切ったラーメンの麺をスプーンにひとかけらだけ載せて、御園生さんの口に入れた。御園生さんは口をわずかにもごもごと動かした。御園生さんにとって、生涯最後の食事になった。
その日の早朝、御園生さんは静かに息をひきとった。
主治医による死亡宣告のあと、美奈子さんは遺体にすがって号泣した。僕も泣いた。看護師としての仕事があったのに、ベッドの前で立ち尽くしたまま体が動かなかった。

葬儀の日は冷たい雨が降っていた。
三年ぶりに身につけた礼服が体のサイズに合っていなくて、ちょっときつい。自家用車を運転して、今富（いまどみ）にある公営火葬場「いちはら聖苑」に向かった。
参列者は僕を含めて五人だけの、さびしい葬儀だった。臨終の日に涙を流し切ったためか、美奈子さんも僕も泣かなかった。
火葬が終わり、斎場を出たとき、背後から「志村さん」という声が聞こえた。振り向くと、美奈子さんが骨つぼを包んだ覆い袋を胸に抱えて立っていた。
「あなたは立派に主人を看護してくださいました。ありがとうございました」
返答に一瞬、迷った。僕は頭に浮かんだことを正直に話した。
「僕は本当に、立派な仕事をしたのでしょうか」
突然、変な質問をしたからか、美奈子さんはきょとんとしてい

た。
「僕は病気で苦しんでいる患者さんを救って、幸せにしてあげたい。患者さんやそのご家族に感謝される仕事をしたい。でも緩和ケア病棟ではそれができません。もどかしいんです」
一般病棟に勤めていた頃の僕は、元気に退院していく患者さんの姿を見ることに大きなやりがいを感じていた。
「看護師として僕がめざしていたものとは違うんです……。懸命に看護しても患者さんは亡くなってしまう。ご主人も鬼籍に入られました。それなのに僕は、立派な仕事をしたと言えるのでしょうか」
緩和ケアにおける看護師の存在意義とはなんだろう。わからない。僕は自分の気持ちを一部始終、美奈子さんに伝えた。
「人間の寿命は誰もが同じではありませんよね。決められた命の中で、いかに幸せな人生を送れるかが大切だと私は思うのです。主人は六十三年という、平均よりも短い寿命で終わりましたが、最後まで幸せな人生でした。あなたは主人に、晩年のわずかな期間でしたが、その幸せのための一端を担ってくれたのです。看護師としてね」
そう言って僕に笑いかけた。
予想しなかったお褒めの言葉をいただいて感激してしまい、僕は返す言葉を失った。
「主人はね、『雄介は俺の息子だ』と言って、あなたのことを慕っていました」
「本当ですか？」
僕も御園生さんを『市原の父』と慕っていた。相思相愛だったのか。気がつかなかった。
「雄介は最後まで心をこめて看護してくれたと、主人は感謝していました。あなたは看護師として、患者に感謝される仕事をしたのです。それが、あなたが私に投げかけた疑問に対する答えではないでしょうか」
僕が今までに緩和ケア病棟で担当した患者さんたちは、幸せだったのか。僕に感謝してくれていたのか。今となっては確かめることができない。だけど、少なくとも御園生さんは僕にそう思ってくれていた。なんと励みになったことだろう。
「ありがとうございます」
美奈子さんの言葉に救われた気がした。これからは今以上に、患者さんの幸せのために努力しなければいけないな。
別れる前に、彼女に伝えておきたいことがあった。
「美奈子さん。ラーメン店、これからも続けてくださいね」
「落ち着いたら営業を再開するつもりです」
「御園生さんは、美奈子さんのラーメンは千葉県一だと称賛していました。次はその上、日本一をめざしてほしいんです。僕のためにも、御園生さんのためにも」
美奈子さんの嗚咽（おえつ）する声が聞こえた。
「市原から日本一のラーメンを出しましょう！」
僕がガッツポーズすると、美奈子さんは「はい」と笑顔でうなずき、左手で小さくガッツポーズした。